

下り坂の最後には、ひとさまの助けがなければ生きていけない要介護の期間が待っている。データによれば、寝たきりの平均期間は8.3カ月。もちろんすべての高齢者が寝たきりになるわけではないが、高齢者の自己否定感、寝たきりにしてもっとも強い。認知症高齢者を見ても、「こんなになってまで生きなければならないのか」と忌避感を持つ人は多い。自立とセルフコントロールに絶対の価値を置いてきた人ほど、そうである。

「ボクの理想の死に方は、ゴルフ場でぼっくり逝くこと」と言った新自由主義系のエコノ

ミストがいる。こういう人には、高齢社会の福祉政策の制度設計をしてもらいたくない。

寝たきりになっても、認知症になっても死なないでいられる文明社会がようやく訪れた。そのことを歓迎するかわりに、どうして呪詛(じゅそ)しなければならないのだろうか。

生まれたときには100%、他人の世話になってきた。生きる過程で他人に依存せずに住むことはない。それなら死ぬときも他人の世話になって何が悪いだろうか。家族の世話を受けたくても家族のいない人もいるし、超高齢社会では、子どもに先立たれる高齢逆縁だ

5 人生の下り坂と要介護

7/23
N

東京大学教授 上野 千鶴子

ってある。ひとりやふたりの子ども数では、家族を老後の保険と考える時代はとうに終わった。

要介護になったときに他人の世話を受けることが、恩恵ではなく権利になったのが介護保険だった。老後の安心のためにできた制度だったはずなのに、3年ごとの改定のたびに、改悪に次ぐ改悪を経験している。しわ寄せを食らっているはずの高齢者は声をあげないし、有権者は座視している。社会保障費抑制が至上命題の政策決定者たちは、自分自身が要介護状態で他人の世話を受けることに想像

力が働かないのだろうか。地位と権力を持った男性たちを見ていると、妻の介護を受けて「逃げ切れる」と思っているように見える。残された妻の「おひとりさまの老後」がどうなるかは、「知ったことではない」ばかりか、番狂わせで自分がその立場に立つ可能性は考えたこともないのだろうか。

他人の世話になることが恥でも屈辱でもなく、生きることがそれ自体で尊重され、高齢者のニーズを満たすサービスが多様な選択肢とともにじゅうぶんに提供され、そのサービスを提供する人たちの生活が保障される…しくみができないと、安心して老いることも安心して死ぬこともできない。国の安全保障の前に、国民の生活の安全保障がまず必要だろう。